研究報告

過去の文化的景観を復原する
―明治初期の滋賀県における里山・里湖利用―

龍谷大学理工学部実験助手・里山学研究センター研究スタッフ
林　珠乃

人々が様々な目的で様々な強度で自然を利用することによって土地被覆は多様化し、結果として人々の生活や生業と自然が一体化した景観―文化的景観―が形成されてきた。文化的景観は、人間の行為と自然要因の相互作用によって形成されるため、自然システムや社会システムの変化により姿を変える。社会情勢がダイナミックに変動する現在、景観の変化が加速度的に進行し、過去の伝統的な景観が失われる傾向があることが懸念されている。

過去の文化的景観に関する研究は、人と自然が相互に作用した結果としての土地利用の変化に注目した研究が主であり、人々がどのように自然に働きかけたのか、またその反応としてどのような生態系サービス（恵みと災いの両側面を含んで）を得たのか、どのような外的要因が人と自然の関係の変化を仲介したのか、を明らかにした研究は少ない。景観復原と合わせて自然利用や自然改変に関して調査した先行研究は、村や町と言った比較的狭い地域を対象にしていることが多く、他地域との比較や広域での空間解析が難しいといった課題があった。

そこで、明治11（1878）年における滋賀県1,397町村の人口・土地利用・産業等について記載した『滋賀県物産誌』の内容を抽出し、地理情報システム（GIS）を用いて視覚化し、明治初期の近代化が進行する以前の滋賀県全域の景観と人と自然の関係を復原する研究を行った。その結果、明治初期の滋賀の人々は、山や湖から多くのめぐみを得て暮らしを営んでおり、身近な自然資源の利用や流通のパタンには地域性や産物ごとの個性があり、それは基盤となる地形や対象となる生物の生態的特性、さらには隣接する地域との空間的な配置を反映して形成されたものであったことがわかった。

過去の文化的景観を復原することは、現在や未来の生活や社会にとって何らかの意味を持つのだろうか？まず、景観の一貫性や連続性を明らかにすることで、景観の本質的なアイデンティティを把握することができる。また、景観の変化とそれを駆動した要因を明らかにすることは、将来の景観を予測し異なる条件下でのシナリオを描くことを可能にするだろう。さらに、変化せずにほとんど同じ状態を維持し続けてきた景観とそこで営まれ続けている生活や生業の手法には、持続可能性を保障する知恵が隠されているかもしれない。かつての景観を形成した自然資源利用やそれを巡る地域間のつながりに関する情報は、大型インフラや化石燃料になるべく頼らない地域循環型の生業を模索する際にヒントを与えてくれる可能性がある。

近年イギリスでは、過去の文化的景観を含む情報をGISで集約・分類・共有し、景観の価値の評価や地域計画を策定に生かす取り組みがされている。このような例を参考にしながら、文化的景観に関する多様な資料や研究成果を重層的に取りまとめ、琵琶湖周辺地域の地域計画を策定することが望まれる。